

提言

人間不在の社会研究？

野村 博

まことに奇妙なことであるが、最近、一方において「社会哲学の復権」が叫ばれているかと思えば、他方において「社会科学の再建」が称えられている。これは、いったい、どうしたことであろうか。

つい先頃、「知識人の復活」と題した論説（一九八一年七月二十六日朝日新聞朝刊）において、池田昌二氏（朝日新聞東京本社学芸部長）は、二十世紀後半における科学技術の高度な発展にもとづく社会の急速な変化のため、また、日本が先進諸国の中でも高水準の成長をとげ、もはや規範とするモデルを失ったため、さらには、学問があまりにも専門化・細分化しすぎたため、私たちが生きている今日、「知識人」が

数少なくなつた、いや、生まれにくい社会になつたのではないか、と論じておられる。ところで、池田氏の言われる知識人とは、「ある分野での深い学識を持ち、しかもその壁にとらわれず、さまざまな領域を自由に往来し、時代の歴史的視野を押しひろげるような批判的知性を持った人、いわゆるゼネラリスト（一般的思想家）」を指している。

人類史上かつて経験したことがない一大危機に直面している現在、ゼネラリストとしての知識人が復活することこそ喫緊の急務である、と池田氏は主張される。そして、知識人が自分の学問の場に生活者としての想像力を取り込み、人間的な想像力で学問と現実との関係を把握しなおすとともに、常に異議申し立ての少数意見として現われる批判者としての知識人の声を尊重する自由な社会を確立することが、わが国のみならず人類の明日を切り開くために強く望まれているのである。

さて、池田氏の言われる「知識人の復活」は、社会学を研究する者にとって、特に厳しく受け留めなければならない提言ではないだろうか。というのは、研究対象を没価値的に把握していく実証至上主義が隆盛している風潮では、社会批判の機能が社会学から欠落して、「時代の歴史的視野を押しひろげる」どころか、現状を無批判的に肯定する守旧の徒が輩出する可能性があるからである。だからこそ、「社会哲学の

復権」が叫ばれるのであろう。

他方、人間不在の今日の社会科学には冬枯れの季節が訪れたと非難されているが、このような事態に対して、社会科学者自身が人間的想像力を欠いたスペシャリストであることをやめ、生きた具体的人間を社会研究の中枢に位置づけることによって、「社会科学の再建」が企図されなければならないのである。

「社会哲学の復権」といい、「社会科学の再建」というのも、要するに、社会研究に生活者としての生きた具体的な人間が——研究の主体としても客体としても——存在していないことに対する警鐘であり告発であると言えよう。

——一九八一年十一月二十二日——

(本学教授)